自然災害の研究もその点全く同じで、災害の軽減防除という目的に向って、いろいろな分野の人が協力してこそその目的が達せられるし、又、各分担者の視野も拡がる。「これが自然災害研究のいいとこですよ」とよく言われたことを思い出す。また、地震などの災害の現場に駆けつけ、災害のひどさ、恐しさを身を以って体験され、「学者が象牙の塔にばかりこもっていてはならない。自分の専問を通じて災害の防除に貢献するのは、人間として当然のことである」との信念を何回か御一緒の飛行機の中でおききした。

先生は大正4年生れであるが、所謂、明治の風格をもって居られた。御病気で通院されていた先生は災害資料の整理を御自宅にまで運んでされていたが、それは病に倒れる日まで続いたのである。

「倒れてのち、やむ」とは先生のような人生をいうのであろう。

心から先生に感謝し、御冥福をお祈りするものである。

（わかはまごろう：北海道大学低温科学研究所所長、前北海道地区部会長）

酒井良男先生に導かれて

太田　　裕

酒井先生ご逝去の訃報は、先生をよく知る人達はいうまでもなく、多少とも自然災害に関心をもつ研究者にとっては近来にない悲しい知らせでした。直後は、衝撃のあまり呆然とし、先生との出会い、先生と共に過ごした日々、先生に接することで得た人生訓のアレコレなどが無秩序に去来し、ご葬儀に参列させていただいた札幌での滞在は、私の最近における最も悔しい日時でした。

ある人は先生を「最後の大学教授」、「孤高の人」、別の人は「ワンマン」とも「頑固人間」ともいいます。人によって、先生との関わり方によって、先生はそれぞれに違った側面をみせ、到底一語ではいい表わし得ない人格の持主でした。私自身、人生における偉大な師としての先生との長い年月にわたる時間をもちながら、先生の全体像について何ら確信めいたことを申し述べられる域には到底達し得ていないことを実感する昨今です。

先生との思い出は山程あります。ここに幾ばくかを書き留め、思い出のよすがと致したく思います。これが、先生の在りし日のお姿を汚し、あるいは過ぎたる偏見とはなっていないことを祈るのみです。

1．出会い

先生のご甚力によって、私が大学紛争末期の地震研究所から北大に移り、工学部建築工学科耐震工学講座担当となりましたのは昭和48年(1973) 4月のことです。それ以来、平成元年(1989) 9

月までの16.5年にわたる年月を札幌で過ごしました。耐震工学講座は、ご承知の方も多いと思いますが、昭和43年(1968) 5月に発生した（第2）十勝沖地震を契機に、北海道地域における地震災害・防災研究の重要性が再確認され、先生を中心とする粘り強い努力の結果として設立されました。この新設講座担当の人選に当って、学科内で激烈な議論がかわされたとのことです。論点の中心は、建築（構造）学を学んだ、いわば正統的な耐震工学の研究者を是とする学科の多数意見に対して、従来枠にとらわれず生新な観点から幅広く人材を求めるべしと主張される酒井先生との対立にありました。先生の、孤軍奮闘の戦いでした。この過程で、私の名前が挙がりました。先生の強いご推薦によるものです。この時期の私が「地域住民を人間地震計と見立てた高密度震度の調査法開発」という風変りな研究をしていたのが先生のお目に止まったのでしょうか。結局のところ、「教授は幅広く考えよう。しかし、助教授は従来枠内での人選に限る」との合意に達し、先生のお考えは基本的に承認され、結局私が新設の講座担当を迎せつかった次第です。この間の、先生のご苦労は－ご自身は殆んど何もいわれませんでしたが－思うにさぞや大変だったことでしょう。先生は、日頃から「大学人は少なくとも10年先、できれば50年～100年先をみた仕事をすべきである。そのためには、学問の既存枠に捉われてはならない」との信念でおられました。この意味で、この人事は先生にとっては真剣勝負であったと推察されます。先生の高邁な精神と粘りが、学科における固定観念を打破せしめた次第です。先生は信念の人でした。ただ、先生のこれほどのご甚力にもかかわらず、その後の耐震工学講座の研究室活動が多少なりともご期待に答え得るものであったか否かについては余り定かとはいえず、この点について心苦しく思っている次第です。

昭和48年2月、私はのこのこ－面接試験を受ける－ため先生に帯同され、羽田空港に参りました。往路の気象が悪いとのことで待機している際にたまたま工学部の小沢教授（原子工学）にお会いし、酒を酌み交わしながらの楽しい一時をもつことができ、札幌への旅立ちをことのほか思い出深いものにしてくれました。昨年9月に先生の葬儀参列のため、羽田空港へ行くと、また小沢教授－既に退官しておられ、数年来お目にかかっていませんでした－にバッタリお会いし、偶然というには余りの符合にくしき因縁を思いました。

2．建築工学科

先生の所属はいうまでもなく工学部建築工学科で、建築構造学第1講座のご担当でした。ここでは、いわゆる構造力学を中心とする研究教育が主な守備範囲とされており、先生はこの枠組みの中で活発な活動をされる一方で、地震と構造物との関わりについて力を入れた研究を続けておられました。なかでも、地盤（土）がもつ耐震工学上の、特段の重要性を他者に先んじて認識され、「地盤工学」なる講義科目を創設されると共に、北海道内の主要地盤がもつ静～動的性質を原位置的に、かつ極めて精力的に研究されました。この過程で、学科・学部さらには大学を越えた、また他分野の研究者との研究交流を行い、人物ネットワークを実現されると共に共同研究・グループ研究の重要性を確信され、チームリーダー・研究コンダクターとしての能力を大いに発揮されました。先生は、この意味で本来的に学際人であり、人材を大切にされる人でした。人材

といえば、こんな話もあります。先生が50代の前半の頃のことですが、この時期地震工学の開拓者としてつとに著名な研究者が他大学を退官されることになり、先生はこの方を学科活性化の切り札として是非迎えるべしと考えられ、実現を意図されました。しかし、その時期は学科には教授の空席がなく、通常の手順での実現が可能な状況にはありませんでした。そこで、先生が発想された方策は、たまたまご担当講座の助教授ポストが空席であったことから、ご自身を降格され、その後に他大学からの研究者を迎えるということでした。このアイデアは、「降格」という人事が至難であるとの行政上の理由から結局は実現しませんでした。これは、先生から直接に、しかも重ねてお伺いしたお話で、それだけに実現を如何に真剣に考えておられたかが想像できます。一般人の常識からすれば全く無茶な話で、大学という特殊社会－果敢な冒険精神が尊重されている筈という意味で－においてもこれに類似の発想はきいたこともありません。先生は人材獲得には自己犠牲をもかえりみない人でした。この精神が、このような思い切った提案そして卓抜のアイデアを支えたものと思われます。先生は超常識の人でした。

3．資料センター

昭和50年度の正式発足に先立つ準備段階の時期からご退官まで名実共に責任者としての職務を全うされ、大活躍をされたことは自然災害関係者の均しく承知しているところであります。北海道地区資料センターの歴史は先生なしに殆ど何も語ることができません。文字通り、雨の日も雪の日も風の日もうまずたゆまず、センターをよりよきものにするための活動の日々でありました。この間に先生がリーダーとして取り組まれた研究、そして突発災害調査は少なからざるものがあり、これらの報告がセンター活動の中心成果となっていることは周知の通りであります。

センターの10数年の歴史にもいくつかの山場がありました。第１の山場、すなわちセンターの発足は、先生の地域内研究者の意志の統一、熱意の集約へのたゆまぬご努力、関係当局との粘り強い折衝・情熱ほとばしる説得の賜物による以外の何ものでもありません。第２の山場は、昭和59年度末で発足以来10年を経過したことから予算がカットされ、それに伴ってセンター活動が停止の危うきに達した時期であります。この時期、先生は既に退官しておられましたが、復活要求のノウハウ等不慣れな筆者（当時センター長）を引張ってその達成に特段のご支援をいただきました。先生は、この危機を単に活動費のカットという矮小化された問題としてでなく、北海道地区の全体活動の危機として把握しておられたように思われます。実際、以後の経緯をみると－金の切れ目が災害研究との縁の切れ目であると広言する研究者もいました－、先生のご判断は誠に適確で、教えられるところ大きなものがありました。このような事態は数年続きましたが、昭和63年度から新規予算が継続的に計上され、一応の危機を乗り越えられたのは誠に幸いでした。

先生が、資料センター運営に情熱を注がれたことは上述の通りです。さりとて、現実のセンターに決して満足しておられた訳ではありません。資料センター（正式には資料室）という名前そのものについても大いなる異議をおもちでした。先生は理想とする独自の構想をもっておられました。その全貌は到底一口で表現し得るものではないのですが、誤解を恐れずに要約するならば、１）北海道地区の自然災害研究の中核・共同機関たるべきこと、２）大学院レベルの教育母胎と

なるべきこと、3）地域に対してオープンとし、地域防災体制向上への積極支援をなし得ること、4）これら諸活動に基礎を与えるべく資料蓄積・整備が進められ関連研究が活発にできること等々の要件を充すところの“自然災害研究地域センター”とでもいえましょうか。この観点からすれば、実現しているのはごく一部にしか過ぎません。先生が、ご退官の数年前から大学院環境科学研究科の設立に甚力され、設立後は協力講座としてその一端をになわれたのは、このような年来の思いと無関係ではありません。災害研究は秀れて環境科学の問題でもあると、先生は確信しておられました。

4．トルコの地震調査

先生は在職中、多くの国々を訪問しておられますが、なかでもトルコとの関わりは特段に深かったように思われます。きっかけは、先生が国連派遣のエキスパートとして1968年にトルコの首都アンカラに4ケ月滞在され、耐震技術の向上に努められたところにあると承知しております。昭和52年(1977)の冬に私はたまたまアンカラ訪問の機会がありました。この時期にトルコ東部に起った内陸浅発型地震について概況を知るとともに、地震断層と被災形態との関係が興味深く研究関心をそそるとの話を、帰国後、先生に致しましたところ、先生は即座に“海外学術調査”として科学研究費の申請を決断されました。いいだしっぺの私自身があぜんとする程の即決でした。幸い先生を代表者とする申請は3年間の継続研究として採択され、アンカラにある国立地震研究所との共同研究として翌年からの現地調査が開始されました。被災の現地は、ノアの箱船が漂着したといわれるアララット山に隣接した地域で、砂漠とまではいえないものの緑の少ない乾燥高原地帯でした。先生共々われわれが現地に到着したのは7月下旬で、日中は35～40度に達する炎天下での調査でした。この中で、先生はリーダーとしての統率は勿論、自らも現地の建築物調査という課題を設定され鋭意調査を進められ－当時60余才でした－私共を驚嘆させたものでした。貼付の写真で、先生の雄姿をお伝えできればと思います。

断層

断層をまたいで立つ酒井先生
（トルコ東部チャルドラン、1978.7.23）

チャイ(茶)ブレークの一刻、トルコ人研究者とともに　(1978.8.1)

この時の調査結果は英文の報告書にまとめられ、相応の評価をいただくに至っております。先生のご退官後は、この仕事を私共が引継ぎ、単一の地震調査からトルコ国内全域の被害地震、かつ長年にわたる継続的な調査研究活動へと拡大されてきました。この間に、幾多のトルコ人と知友になり、若手トルコ人研究者の北大における研修を引き受けるなど、トルコを中心とする研究交流は年々活発になって参りました。今や、トルコは私共が国を越えて地震問題を考える場合の出発点ともなり、全ての問題はトルコにありとまで確信できるに至りました。先生の、「トルコをやろう」のご決断で始まった調査研究は、10年を経た今日もたゆまなく続けられております。さらに、明年度からはわが国の外務省の特段の支援を得て、内容一新の発展が想定されるまでに至りました。折々の報告におとずれる筆者に暖かい激励と、時には苦言を呈せられた先生のお顔が目に浮ぶ今日この頃です。先生は実に先見の人でした。後進にたくまざるエールを届けてくださる練達の教育者でもありました。

5．年月の中で

学問に尋常ならざる厳しさをおもちの先生も、一旦これを離れるとご家庭を大切にされ、ご家族に暖かい眼差しを向ける、普通人でした。ご退官後、隔日に出勤（？）された資料センターでのランチボックスは全てが奥様の手作りでした。これは、これまた家庭菜園の野菜・果物類で色どられていました。先生は、このランチを無条件に愛好しておられました。私が、この件について詳しいのは時折、これをおしようばんさせていただいていたためであります。実に、おいしく仕立てあげられておりました。生協食堂へ昼をとりにゆく道すがらお邪魔することが多く、空腹模様の私に同情されたのかも知れません。

先生は、北海道が作り出す自然の風物をこよなく愛しておられました。なかでも季節を色どる木々・草花にはご造詣が深く、同道の折りなど「あれは何々、これは然々・・」と問わずがたりの説明を受け、当方はあまりの無知ゆえにしばしば困惑したことを覚えております。先生が長年

住んでおられた教養部体育館裏の官舎の玄関先には、季節になると、丹誠の花々が一斉に咲き出し、隣りに住むわたし共の目を楽しませてくれました。なかでも、先生が特に愛好されたマリーゴールドの可れんな花々は実に美事なものでした。もれ承わるところでは、お嬢さまにはこの花にちなんだ名前を付けられたとのことです。先生は、情愛に富む人でした。

先生は、お酒が入るとよく「俺の名前は“A Good Gentleman in a Sake Well”（多少違っているかも知れません）である。だから、酒が強いんだ」と冗談とも本気とも判らずおっしゃることがよくありました。これにはイエスともノーとも相槌を打つ訳にもいかず、ほとほと困ったものでした。これを外国でもやられるものですから、居合わせた人達は相当ビックリされたことでしょう。皆さんもこんな場面に遭遇されたことがおありと思いますが、如何？　先生は、実に剛毅の人でした。

6．別れ

私共一家が札幌を離れたのは一昨年10月でしたが、これに先立って先生は奥様共々に送別の席を設けてくださいました。北海道ならではの、とても普段には味わえないスペシャルディナーでした。東京ではとても食べられないだろうとの、先生の先見（？）にもとずく誠に心暖まる、しかし恐縮一杯のおもてなしでした。事実、東京へ来てからはあれ程の食事をいただく機会にはいまだ恵まれておりません。

あれから一年を経ずして、先生が幽明世界をことにされるなど到底思い至るものではありません。今でも信じ難度い気持ちで一杯です。先生が如何なる人であったかを云々する力は今の私にはありません。しかし、先生が人生の達人であり、先生との出会いに始まる私自身の、そして私共家族の10数年は、それ故にこそ極めて充実したものであり得たことは断言できます。先生は私共を導いて下さった北斗の星でした。

先生、さようなら。ご冥福を祈りつつ。

（浄書は地震研究所　柳沢馬住氏を煩わしました。お礼申し上げます。）

（おおたゆたか：東京大学地震研究所教授）

酒井良男先生と地震観測

鏡　味　洋　史

1．はじめに

酒井先生のお名前を知ったのは、卒業後間もない1966年だったと記憶している。当時は強震計ＳＭＡＣが全国各地の配備され新潟地震を始めいくつか強震記録が取れ始めた時期だった。そのような時期、1962年広尾沖地震の釧路気象台で得られた400 gal にも達する記録についての議論